

# 羅針盤



## 知っていると保てる面目と外来診療のリズム

大槻 マミ太郎

Mamitaro Ohtsuki

自治医科大学皮膚科 教授, Visual Dermatology 編集委員

本号は、「知らないとはずかしい」シリーズの第4弾である。

実は、このシリーズの命名には、いささかの時間を要した。「知らないと苦労する」、「チョット知っている」と得をする、「一度見たら忘れない」等々、様々な候補があげられた。編集委員持ち回りで羅針盤を担当することになって、3

回目の江藤先生は敢えて「知らなければ聞くのは恥ずかしくない」を掲げた。そこで私は、「知っている」と保てる面目と外来診療のリズム」という意識をつけたいと思う。

多忙な皮膚科の日常外来診療にはリズム、メリハリが必要である。そう、強弱のリズム。鑑別がむずかしいところで存分に長考するために、スピードを出せるところでは思い切り出す。患者さんは迅速な診断と対応を求めているので、スピード違反を気にする必要はない。3分はおろか、1分診療でも患者さんは大満足、という場合すらある。さて、リズムを保つためには何が重要か？

ひとつの答えは、「知らないとはずかしい」シリーズに登場する common disease (や生理的な状態) が確実に診断できることである。本号の1回目は大原先生の「病気というほど大げさじゃなし、かといって……」で始まっているが、今回供覧されている pearly penile papules がよい例であろう。要は、知っていれば一瞥で診断できる疾患(や状態)の患者さんがくれば、まず時間がかからないし、診察する方もされる方も気分がいい。そばに研修医などの若手の医師がいれば、教わる方はビ



ジュアルでスピーディな皮膚科の真骨頂を学び、教える方も面目躍如なばかりか、忙しくても自ずと元気も出ようというものである。

逆に、知らないとどうなるか。例えば、pearly penile papules を知らなければ、1分で済む説明がSTDとの絡みで10倍、20倍ともなり、中には生検に走る、

液体窒素をもち出す、などという人もいるかもしれない。皮膚病は難問奇問が多い。これぞ、という難問に出くわした際の余力を残すために、平易な問題で消耗してはならない。知っているのと知らないとのでは、雲泥の差があるのである。

私は皮膚科研修2年目で、関東中央病院の日野治子部長のもと(共通の師匠をもつ江藤先生も奇しくも本シリーズ3回目で当時の経験に触れている)、へたりそうに忙しい夏の外来の中、部長の「これ知ってる? 知らないか。忘れちゃだめよ!」という甲高い声に揺り動かされ、診療に活気を取り戻したことが何度あったことだろう。一瞥でサクラソウやギンナン、マンゴー、シイタケ、水銀体温計などの原因を言い当てられる名人芸は、皮膚科診療の極意ともいえる。

皮膚科診療は、元気とリズム感が売りである。“知ら恥ず”シリーズを自家薬籠中のものにしておけば、外来がかつたるようになってきたところに本来のリズムを、そして元気を取り戻せる瞬間が何度もやってくるに違いない。